

施設便りに加え
シニアライフを豊かにする
地域の情報を届け

2020
JANUARY

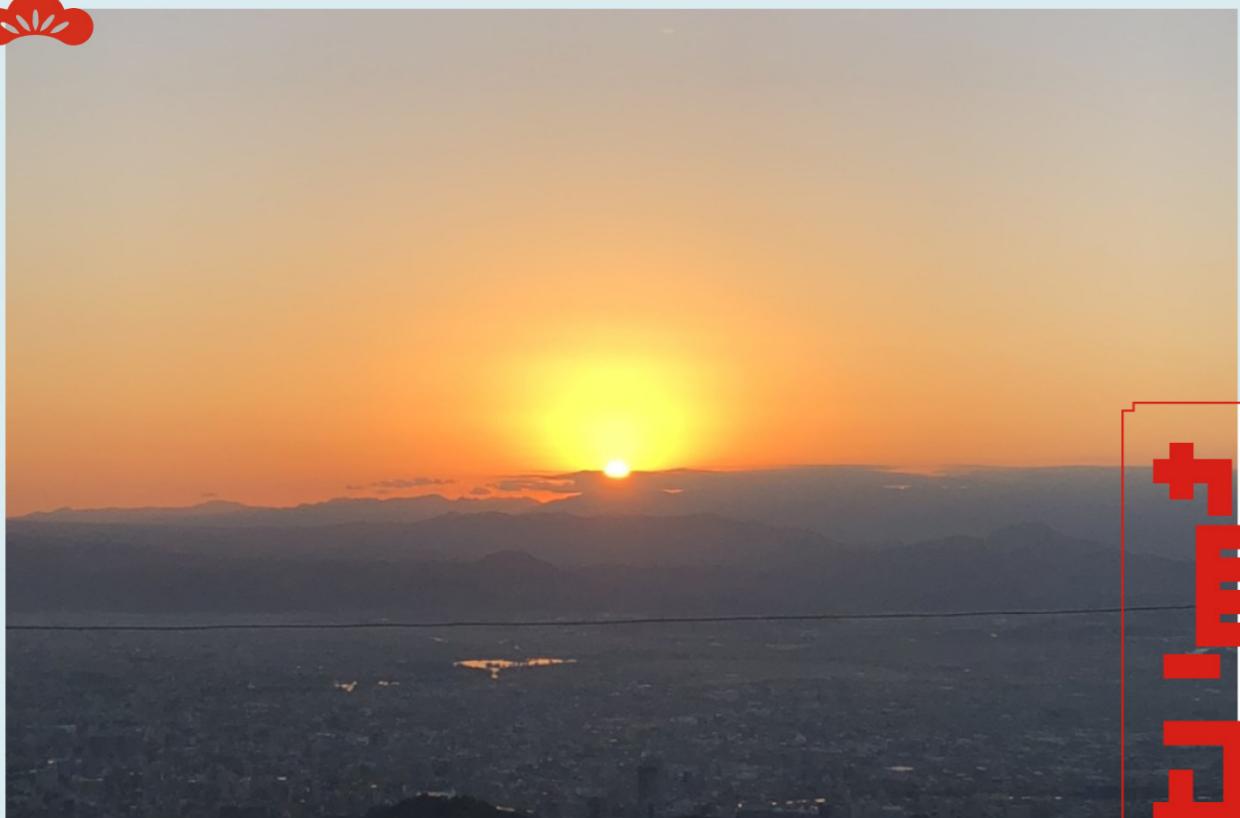
#45

やかんの丘 たより

河内福祉村

社会福祉法人 陽光
「みかんの丘」

2021 HAPPY NEW YEAR



本年も宜しく御願い致します

新年のご挨拶

社会福祉法人 陽光 理事長

上野 歩



皆さま、新年あけましておめでとうございます。

昨年は皆さまにとってどんな一年ありましたか？

当施設としては、感染症に対して考えた一年であり、感染症対策に終始した一年でした。日常の業務においても、今までとは違う生活様式に合わせて日々の業務となっております。御利用者様・御家族様・地域の皆様も自由に施設への面会等も行えていたのが、

様々な形態での面会へと様変わりしています。

施設の行事についても、中止であったり、小規模で開催、御利用者と職員のみであったりと非常に残念なことになっていました。

さて、今年は「丑年(うしどし)」です。「牛は古くから酪農や農業で人間を助けてくれた大切な動物でした。大変な農作業を最後まで手伝ってくれる働きぶりから、丑年は「我慢(耐える)」「これから発展する前触れ(芽が出る)」というような年になるといわれています。そのことから粘り強さと誠実さが特徴とされるようになります。一歩ずつ確実に歩を進めていきたいと思います。

今年は東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。華々しい選手の活躍を期待したいものです。

本年も引き続き施設において御利用者を中心とした支援行っていきたいと思います。よろしくお願い致します。

社会福祉法人 陽光 みかんの丘

- ・特別養護老人ホーム・デイサービスセンター・居宅介護支援事業所
- ・ショートステイ・地域交流センター「夢見館」





年頭の御挨拶



みかんの丘
施設長
池尻 久美子

新年明けましておめでとうございます。

年頭に当たり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

旧年中は新型コロナウイルスの影響の中、皆様方には、様々なご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年は、「庚子(かのえね)」で、これまでの価値観や概念を、まったく新しい価値観、概念へと変えていく大変身の年と言われていました。その通り、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受けて、仕事、学校、趣味、買い物など、あらゆる面で生活様式を見直す必要に迫られ、私たちの職場においても、たくさんの変化をもたらしました。会議はWEB会議、面会はオンライン、テレワークの導入と、デジタル化を加速し、感染防止のため様々な対策を行ってまいりました。

今年は、「丑年」。干支では「辛丑(かのとうし)」で、時代の転換期の年で、これまでの固定観念をさらに変え、それを動かしていく時だと言われています。

時代は常に変化していきます。 私たちは時代に取り残されないように、この機会を、現状から成長していく最適の機会ととらえ、業務プロセス自体を変化させ、各現場の業務効率化をはかっていきたいと考えております。

一日も早く、諸行事が再開できるようになり、皆様とお目に掛かれることを切望しています。

皆様のお力、ご協力などをいただきながら、地域に根ざし、共生できる施設として、職員それぞれが力を合わせて信頼をお応えできるよう、今後も努力してまいりますので、本年もこれまで同様のご支援を心からお願い申し上げます。

末筆ながら、皆様のご多幸とご健康を祈念し、新年の挨拶とさせていただきます。

令和三年(二〇二一年)元旦

みかんの丘 研究発表会

第15回となる「みかんの丘研究発表会」が行われました。研究発表とは、日々の成果を発揮する場であり、取り組みがどのように活かされているのかどうかを報告する重要な場となっています。この研究が困ってじる方の参考になることが今後のみかんの丘の成長に繋がると考えています。

「介護の模範」になる施設を目指すため、チーム一丸で作りあげた研究結果です。

今回の研究発表でも各事業所から複数題の発表が行われました。その研究発表の中から一部をご紹介致します。



集団体操で結果に「ミニスト!」～体重に着目した運動効果～

■はじめに

今回、当施設で実施している水分ケアについての研究を行い、水分と身体機能や ADL との関係性や今後の課題を明らかにすることができた。考察を踏まえ、以下に報告する。

■目的

『水分が大事』といふ言葉をメディアで聞くことは当たり前のようになってきている。しかし、通所サービスで水分ケアに力を入れている施設は少なく、水分の摂取が利用者の身体機能や ADL にどのような影響を及ぼしているのか疑問に思つた。そのため、水分摂取量と様々な項目を比較・検討し、利用者の自立支援のためにどのような水分ケアを行なうべきか明確にすることを目的とする。

■方法

①利用者のデイ利用時の一日の水分摂取量を記録する。月末に各月の平均を出す。
②体力テスト(握力、TUG、10M歩行)を3ヶ月に1回実施し、一年間を通しての身体機能の変化を調べる。
③事故報告書・ヒヤリハット報告書の件数を集計し、月別の合計を出す。その合計件数と水分量の関係性を

上を目的とする。

■方法
対象は7/21～9/19 の約2カ月間継続的にデイを利用した利用者28名(要介護19名、要支援9名)。対象に対して体操(立位・座位)の目的を説明しデイ利用時必ず一回以上実施。また体操開始前と2ヵ月後に体組成測定・アンケート(私生活での運動・健康に関する項目)を実施し、体重・体脂肪率・全身骨格筋率を算出。事前データと最終データを比較する。解析はCORREL相関係数を用いた。

■経過・結果
アンケートにて、運動意欲に対する質問から3群(A群：C群：意欲なし)に分類。A群17名、B群9名、C群2名。意欲あり・B群：意欲は低いが運動の必要性を感じている。C群：意欲なし)に分類。A群17名、B群9名、C群2名。体組成データの比較では、20名が体操後に体重減少。その中でも13名は体脂肪率減少・全身骨格筋率増加という結果となつた。相関係数では体脂肪率と全身骨格筋率に負の相関を認めた。
また運動後のアンケート結果は、A群22名、B群5名、C群1名。C群・B群からA群への移行を認めた。特にB群の間食頻度と運動に対する意欲に変化が見られ、A群では

まず全体の結果として、一年間を通しての一人当たりの平均水分摂取量は503ccであった。一番摂取量が多い月は7月で610cc、一番摂取量が少ない月は1月で447ccである。
次に、身体機能の変化と水分摂取量の関係であるが、維持・向上群と低下群に分けて平均水分摂取量を比較した。両群で摂取量の明らかな差ではなく、水分量での優位な相関性は得られなかつた。しかし、身体機能が低下している利用者は、一年間を通して水分摂取量が減つてきていたという結果が得られた。
最後に、事故報告書・ヒヤリハット報告書と水分摂取量の関係性では、水分摂取量が多い月は事故・ヒヤリハット報告書が多いという結果が得られた。

考査ある。
期間は令和1年7月～令和2年6月で、継続利用のある利用者(途中入院・入所期間含む)要介護27名、要支援10名のデータを集計し、比較・検討する。

■経過・結果
まず全体の結果として、一年間を通しての一人当たりの平均水分摂取量は503ccであった。一番摂取量が多い月は7月で610cc、一番摂取量が少ない月は1月で447ccである。
次に、身体機能の変化と水分摂取量の関係であるが、維持・向上群と低下群に分けて平均水分摂取量を比較した。両群で摂取量の明らかな差ではなく、水分量での優位な相関性は得られなかつた。しかし、身体機能が低下している利用者は、一年間を通して水分摂取量が減つてきていたという結果が得られた。

ついで、竹内は述べており、高齢者への水分ケアは有効であることが示唆されている。しかし、私たちの働く通所介護施設は在宅生活からの外出の場となつていて、在宅での生活も管理することは難しい。そのため専門職として大切なことは、毎日一緒に過ごす家族よりも、利用者の変化に一早く気づく視点を持つということだと考える。例えば、水分をよく飲む利用者は自ら運動を選択され周りを見ながら動かされる。反対に、水分を飲まない利用者は傾眠傾向が強いなど、覚醒度が低いことが多い。意欲や覚醒度が低下すると、もちろん身体機能の低下や注意力低下による転倒などにつながる。そのため、水分量は利用者の意欲や活動力、いわゆる「やる気」の指標となつていいのではないかと考える。また、研究データの結果より重いと感じたのは、水分量の変動である。以前飲めていた水分量が飲めなくなっている利用者は、確実に身体機能も低下している。すなわち、水分量が減つてきたということが、より自立支援に繋がるのではないか。